

山陽新聞夕刊

【一日一題】

【医療環境(有難い)】

「有り難い」の反対語は？

岡山市病院事業管理者、岡山市立市民病院長 松本健五

従来からの確固たる価値、権威、あるべき姿、当然と思われていたことが揺らいできています。政治家、官僚など、本来尊敬されるべき指導者の立場の人々であるはずが、失望され、信頼を失っています。医師の立場も大きく変貌しています。

最近、「有り難う」という「感謝の気持ち」を持つ人が少なくなっている感があります。「有り難い」の反対語は「当たり前」です。手術の説明を、患者のご家族も忙しいだろうからということで、「日曜日」にしたところ、以前は「有り難うございます。お休みのところ本当に申し訳ない」と感謝されていました。しかし、最近では、「日曜日は無理」といえば、「なぜだめだ。医師は24時間365日働くのが仕事だろう。当たり前だろう。」などという人もあらわれるようになってきました。残念で悲しくなります。

手術そのものも、外科医の献身的な研鑽・努力により、救命困難、また後遺症やむなしと思われていたものが、回避でき治癒するほどに進歩してきています。その結果、治るのが「当たり前」ととられるようになってきているのも事実です。治療は病気を治すことを約束していません。医学的知識にしたがって最善を尽くすという約束なのですが。

とはいえ、お互い感謝、信頼し合える環境づくりには、医師は、患者、社会とのコミュニケーション不足の解消の努力と、「当たり前」を跳ね返し、「有り難うございました」といわれるよう更なる研鑽を積むべきでしょう。最近話題の（仮称）岡山総合医療センターも、市民からはもちろん、働く医師、医療従事者、他の医療機関など関係各位から「なるほど、あって有り難い」といわれる病院を目指し、「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」たゆまぬ努力をする必要があります。